

## 安井琢磨教授・喜多村浩教授の 古稀をお祝いして

社会科学研究所長 青 柳 清 孝

経済学にそれぞれ大きな足跡を残された本学の安井琢磨教授と喜多村浩教授が1979年にそろって古稀を迎えられた。両先生の成し遂げられた学問的業績をたたえかつ今後の御健康を願ってささやかなお祝いの会を開いたのはつい先ごろのことであった。古稀をお祝いするということは反面、両先生が大学院教授としての職をお離れになるという、私たちにっては寂しい現実をも意味することである。教育と研究の両面における痛手はまことに大きい。

安井先生は、昭和14年母校の東京大学経済学部にお務めになり、いらい東北大学教授、大阪大学社会経済研究所教授を経て、昭和47年本学社会科学科教授として御着任になっている。昭和50年からは大学院教授として教育にあたってこられた。先生の御業績はわが国の理論経済学における先駆者としての役割を果たされたことにある。昭和46年には、経済研究に数学的分析を導入した業績に対して、文化勲章が与えられた。

校内でお見かけする先生の横顔には、学問の厳しさを追求してこられた半世紀にわたる年輪がきざみこまれているように思われる。直接・間接に指導を受けてきた学生は、学者としてのまたキリスト者としての先生から必ずや多くのものを学びとったに違いない。

一方、喜多村先生は、昭和6年渡欧され、巾広い経済学者としての基礎を固められたのち、スイスを中心に研究者としてあるいはまたジャーナリストとして活躍された。昭和23年帰国後は読売新聞論説委員をつと

められ、2年後に新制の都立大学の経済学教授に迎えられた。教育にあたられる一方で、国連アジア極東経済委員会経済開発部長をもつとめられた。都立大学御退任後は、いくつかの要職を経られ、昭和51年に本学大学院教授に御就任になられた。先生の学問的業績は日本における国際経済学の発展に果たした役割にある。近年ではとくに南北問題に深くかかわることで学問を実践し、この方面でも日本を代表するお一人となられた。パイプをくゆらせ独特のアクセントをもって語られる先生の姿は印象的である。普段はにこやかな先生も、授業の場ではきびしく学生を鍛えられた。

両先生が専任から身をひかれたのちも、客員教授として事情の許すかぎり、引続き御指導下さることになったのは、私たちにとり望外の幸せである。安井先生は今後研究・著述に専念され、喜多村先生は1982年開校予定の国際大学大学院国際関係学研究科長に就任されるとうかがっている。願わくは、両先生とも御健康に留意され、その深い学殖をもって、未永く私たちを御指導下さるよう改めてお願い申上げる次第である。

本誌は、両先生のこれまでの御教導に対する感謝のしるしとして、関係者がそれぞれ日頃の研究の一部を記念論文集の形に編んだものであり、これを両先生の机下に献げたいと思う。